ICE HOLE

・・・

確か、雨の降っていた日だったと思う。何となく薄暗くて、一定で単調な雨の音がして、そして、草花の葉が水にぬれたような臭いがしていた。子供の頃、小学校にあった大きな松林の中を歩いていたときに嗅いだ臭いと同じであるような気がして可笑しかった。山梨の山奥出身の私が、わざわざ都会に出てきて故郷の香りを探しているのは、我ながら奇妙なことだった。

ここのところ不況でめっきりスポンサーが減り、今後の経営も怪しいような小さな出版社で働いて、二年になる。危ない、危ない、と言いながら二年である。状況は変わらず、良くも、悪くもない。

ただ、同僚が一人死んだ。

毎日朝は七時、夜は日付が変わるまで帰れないという長時間勤務が辛い、とぼやいていたその子に、辛いのは皆同じだ、とか、甘えるな、とか言ってるうちに、辛い辛いが「消えたい」になって「死にたい」になった。

あんたは死にたくなって死んじまうからいいかもしれないけどさ、そうやってあんたが逃げ出して、放り出したモンはみんな私達のところに来るんだよ。本当っ迷惑。つーか、死にたいなら死になよ。どうせ「死にたい」って軽ーく言って周りに可哀そうがってほしいっていう甘えで

しょ。面倒くさいよ。何が面倒くさいってあんたのために可哀そうがってやらなきゃなんないのが面倒くさいよ。死んじゃいなよ。そうしたら、あんたのことわらってやるからさ。負け犬だって、笑ってやるよ。

そう言ったら黙った。「死にたい」が無言になって無言が自殺になった。雨の中、出勤したら、職場の机の中にコピー用紙が小さく折りたたまれて入っていた。開いてみると、中にはブルーのボールペンで

「わらえよ」

とだけ、妙に丁寧な字で書いてあった。それを見て、同僚が死んだことを知った。嘘だとか、狂言だとは思わなかった。

その日のことだ。朝嗅いだ雨の臭いを思い出したのは。

課長はいつまでも来ない同僚の、今日が締め切りであったはずの記事を心配し、同僚の家に電話をかけた。が、誰も出なかった。私が課長の命令で向かった同僚のアパートはもぬけの殻で、今朝の新聞だけがポストに突っ込まれたまま、雨の水気を吸って、くたくたになっていた。私はそこから課長に電話をかけ、同僚がいないことを伝えた。課長は同僚が提出するはずだった文章を私に探させたが見つからなかった。

元々、見つかるはずなどなかったのだ。

見つからないことを伝える電話もせず、ただ同僚の部屋に大の字で倒れてみると、動けなくなった。

同僚の死が悲しかったわけでもないのに、その後よく眠れなくなった。忙しいせいだと気にしないでいたら駅のホームから線路に転落、その後睡眠不足で動けなくなって病院に運ばれた。

医者は「うつ」だと言った。

課長はこれ幸いと私を休職にし、医者の診断書をたよりに保険金の半額を手に入れた。

元々、親戚のコネで無理に入った会社であるから、別に

なんとも思わなかった。元々、そんなに仲がいいわけではない親の元へ転がりこまねばならないことが酷くおっくうだった。

＊

実家の近くに青木ヶ原樹海がある。というより、住んでいた村が、すっぽり樹海の隣にある。

自宅に向かうバスの中、窓からそっと外をのぞくと、背の高い赤松と背の低い名も知らぬ木々が道の端に並び、その間にいくつものラブホテルの看板が並んでいる。自殺の名所と、生命誕生のきっかけの場所がともに同じような場所にあるのは、それはそれで皮肉であるような気がした。

まだ、このあたりに住んでいたころはそんなことは思わなかったはずだった。町は変わっていない。ということは、自分だけが変わってしまったということか……。

次のバス停で乗ってきた夏に入る頃だと言うのに季節はずれのスキーウェアを着た青年は、他にもあいている席があったのに、わざわざ私の隣へとやってきて座った。

「よお」

私は青年の顔をよく眺めてみた。顔つきに見覚えはない。というより、思い出せない。

様子からするに知り合いのようだったから、適当にあいさつでもしようかと思ったが、声がうまくでなくて口の中で音がもごもごと言った。そんな自分に自分で腹が立った。だが、青年は私が何か言いたげであることを無視するように続けた。

「もしかして、覚えてない？　俺だよ、俺。前田。クラス同じだったじゃん。……あれ？　メグムちゃんだよね？　人違いじゃないよね？」

頭の中を探してみたが、やはり前田という人物は思い出せない。しかし、中学生の頃の私のあだ名を知っているところを見ると、やはり知り合いのようだ。

「あぁ、……うん。覚えてる。久しぶりだね」

「いや、その反応じゃ、絶対覚えてない。これは確信ってやつだね。まぁ、覚えてる覚えてないなんてあんまり関係ないんだけどね。ところでさ、ナンデ俺が梅雨も終わりになるんじゃないかって時にスキーウェアなんて着てるか知りたくない？」

なんだか、この青年は中学生で精神年齢が止まってしまっているようだ、と思えた。こういう類の人間は聞きたくないと言ったって勝手にしゃべる。経験上、八割がそうだ。

「別に」

「可愛くないなぁ。まぁ、聞きたくなくても言うんだけどさ」

青年はここで少し笑った。

「実は俺、
もう死んでるのでした」

「何それ、何かの比喩？」

信じる信じないの話以前に、頭の中で死んだ同僚の顔がちらちらと現れた。腹が立ってバックの中から煙草を引っ張りだして百円ライターで火をつけた。前田とか言うやつが禁煙家だろうが気にするつもりはない。

「違う、違う。マジ。本当と書いて、マジ。本気とも書いて、マジ」

あぁ、そうだ、と前田は声をあげると左手の手袋をはずして私の方へ突き出した。

「俺、脈がないんだよ。さわってみて」

断っても左手をひっこめることはなさそうだったから右手で前田の手首をつかんでみた。水にさらしたゴムを、軽く水気をふき取って渡された、そんな感じの感触だった。

「本当だ、脈がない」

「だろ、だろ。だから俺はもう死んじゃってるんだ、って言ったじゃん。信じた？」

「全然」

何でだよ、と笑ってる前田は、中学生みたいで生き生きとしていた。初めてディズニーランドにやって来てはしゃ

いでる子供のようだ。
「死んでんだったら、もっと悲しそうな顔してもいいんじゃない？」
「嫌だよ。死んでたって、今、悲しいわけじゃないからね。俺は演技派俳優じゃないし」
「えっ？　じゃぁ、……死にたかったの？」
「どっちだと思う？」
　私は前田の顔をもう一度眺めてみた。二週間くらい、床屋に行きそびれてると思われるような顔、目の下にあるくま、青白い顔。そうしているうちに消えた同僚の面影を前田の顔の中に探している自分に気がついて不快になってやめた。
「全然」
「だろ。別に死にたかったって訳じゃないんだよ。たまたま死んじゃっただけで。つーか、自殺じゃなけりゃ、死にたくなるなんてことないでしょ」
「どうかな」
「どうかなって？」
「死にたいなーとか口走ってたらたまたま車に轢かれたとか」
「あ、願いがたまたま叶っちゃった、みたいな奴？　そういう奴っているのかなぁ」
「いるでしょ、全世界探せば」
　煙草をくわえたまま、外を眺める。人気のないガストの前を通りすぎ、石屋の前を通りすぎたあたりで前のシートの後ろ側についている灰皿に「禁煙」の文字を見つけた。古いバスだ。禁煙ブームに乗って喫煙車を禁煙車に変えたのだろう。その間、前田は何がおかしいのか分からないがクスクスと笑っていて、とても死人のようには思えない。それ以前に幽霊って触れないんじゃなかったっけか。
　とりあえず「禁煙」を無視して煙草を目の前の灰皿に突っ込んだ。
「変わってないわーメグムちゃん。今日も全世界メッタ斬り的な」

「誰がメッタ斬りしたよ」
「だって、そうじゃん。究極論でメッタ斬り」
　そう言う前田の様子を見ていると本気で私のことを知っているようだった。ならば余計に前田と話していたくない。
「ま、そんなことはおいておいてさ、メグムちゃんは何でこんなところにいるよ？　東京でてバリバリの OL してるってメグムちゃんのお母さんが言ってたけど」
「休職中」
「ケガ？」
「全然、バリバリ元気」
「んじゃ、何で」
「うつ、って言われて追い出された」
　前田はここで少し真面目そうな顔になって二、三回うなずいた。
「んじゃ、メグムちゃんは死にたいの？」
「全然」
　あのヤブ医者が、とまで言って、どうしてここまで前田に言ってしまっているのか不思議になって、それでも途中まで話してしまったからには仕方がないから同僚のことも話した。これだけベラベラ話せば近所の人にも今の自分の状況がばれてしまうだろうか。なんだか、それは避けなくてはならないことのような気がして、そこまで考えて、今ここで前田に話しているということは、このバスに乗っている乗客すべての人間に私の状況がどうであるか、話してしまっていることになっていることに気がついた。一瞬、血の気が引いた。周りを見渡せば私と前田のほかに誰も乗客はいない。前田は私の様子を見て、どうした？　と声をかけたが私は何も言わなかった。前田は右手に持ったスキー板を抱えなおし、しばらく黙って前を見た後、また私の方を見た。目が合って、なぜか私は自然と目をそらし、また外へと視線を変えた。
「ところでその同僚、名前は何っつうの？」
「島田。島田静香」

「……知らないなぁ」
「知ってるわけないよ。あの子、県外者だもん」
そして一度でいいから私を彼女の地元に連れて行きたいと、へたれる前に言っていた。
「で？　いなくなって、わらってやったの？メグムちゃん」
「まさか、笑えるわけないじゃん」
「ショック？」
「別に。死にたきゃ、死ねばいいんだよ。むしろ、そんなこと言われるよりかは死んじゃってくれた方がマシ」
自分で言って自分に腹が立った。ただの強がりだと分かっているからだ。
「ふーん」
前田のそう言う声が自分を見下しているようで腹が立った。
「むしろ、いなくなってくれてせいせいだよ。皆辛いのにあの子だけ辛い辛いって言ってるのって甘えだよ」
「……んじゃ、うらやましかったんだ」
「うらやましくなんかないよ」
「でも、死にたいんでしょ？」
「死にたくなんかないんだってば。私は『うつ』じゃないし、病気でもない。こんなど田舎に追いやられたのはヤブ医者の誤診のせいなんだってば。どうだっていいよ。同僚のことなんか」
「でも、やっぱり自分のせいなんじゃないかって思ってるんでしょ」
おっくうだった。返答することがおっくうだった。と、言うよりもプライドが許さない。私は強い人間だ。あぁ、そうだとも！
道路の左右がどちらも森になってしばらくして、前田は下車のボタンを押した。軽い音が響いて、電子音声のような女性のアナウンスが入った。

「明日、午後の二時にさ、『氷穴』の前にいるから。気が向いたら来てよ」
「死んでんでしょ」
「信じてないくせに」
前田は少年みたいに笑ってバスを降りて行った。
家に帰ってから親の小言を聞き流し、昔の自分の部屋に入って鍵を閉めた。自分でも分からないまま部屋の片隅にいつの間にか体育すわりをしていて、目に、涙が一杯たまっていることに驚いた。食欲はなかった。寝ることもなかった。そのまま朝を迎えた。
卒業アルバムを探したら、やはり前田なんていう男はいなかった。だからというより、親に会いたくなくて、そのままバスに乗って『氷穴』に向かった。

＊

昔、純子ちゃんっていう女の子が、中学のときのクラスにいて、ともかくスポーツ万能で有名だった。私達が誰々先輩にクラスの〇〇ちゃんが告った、とか、そういう話題で盛り上がってた頃、純子ちゃんはとにかくバスケ命でそれ以外のことは何も考えてなかった。男子の中でプレーしても引けをとらなかった。そのせいか、身振りも常に男っぽくて、一人称はいつも「俺」だった。スカートをはいていても足を広げているのは勿論のこと、ワックスで固めたのかと思うほど大胆な寝癖のついたままの髪で登校し、いつもケンカばかりしていた。
私立の高校へ推薦が決まっていたのに、結局そこへは行かなかった。顧問の教師とレギュラーのことでもめて、流血騒ぎをおこし、もののついでに煙草を吸って、推薦が取り消されたのだ。
当時、どちらかというとマジメちゃんだった私は、バカじゃん、ぐらいにしか思わなかったし、勉強の方が忙しくてすぐに純子ちゃんのことを忘れた。再会したのは高校に入ったときで、富士吉田にあるガストでドリンクバーをお

供に勉強しながらねばっていたときだ。純子ちゃんは制服を着ていなかった。ジャージのようなスウェットのような、いずれにせよ、パジャマみたいな服だった。

純子ちゃん自身、誰でも良かったのだろう。知っている人であれば。

たまたまそこにいた私を見つけると、店員に何かを言ってこちらへやって来た。

「久しぶり。メグムちゃん。俺のこと、覚えてるよね」

その時も、覚えてないとは言いづらく、覚えてる、と言った。それが間違いだったのだ。

純子ちゃんは私の携帯のメアドを聞いた後、風船に針でも刺したかのように愚痴り始めた。

バスケの顧問、親、友人、今の状況、隣の家の犬、クラスメイト。

たいていはウザイしか言わなかった。それでも聞き続けたのは単に断れなかったからだ。

最初から相手の支えになれるほど強い人間じゃないのなら、悪口なんて聞かなければ良かったのだ。

間違いを犯した私は精神的にまいってきたらしかった。まずは食べ物がのどを通らなくなった。私が体調不良になっているにも関わらず、自分のことだけを話す純子ちゃんに腹が立った。そして純子ちゃんに再会して三ヶ月でキレた。

そのとき私が何を言ったのかは分からない。覚えているのは、純子ちゃんの唖然とした顔と頬をつたう涙だけだ。

その後純子ちゃんがどこに行ったかは知らない。食べ物はのどを通るようになった。その代わりに純子ちゃんを破滅させた。ちょうど今回の島田静香のように。

その通りだ。私は私が島田を殺したんじゃないかと思っている。でもそれを認めたら私は生きていられないのだ。

人の苦労を安請け合いした自分が悪いのだ。でもそれを認めるには私は弱すぎたのだ。

＊

『氷穴』とは、樹海の中にある溶岩でできた洞窟で、真夏でも中は常にひんやりとしている。近くにある『風穴』と同様、中は常につららができているくらいだ。

バスを降りると、草花の、水にぬれた臭いがしていた気がして動けなくなった。そりゃあそうだ。あの時の臭いは故郷の香りだ。つまり、ここだ。

前田は昨日と同じ格好でいた。誰も不審そうな目を向けていない。

なぜ『氷穴』なのか聞いたら、『氷穴』と『風穴』の中に入ったことがないからだと答えた。

「どうせ来るんじゃ女性と来てみたかった」

「ふざけてる」

「いいじゃん。カップルみたいなフリをしてさ」

「嫌だ」

「でも来てんじゃん」

「家に居たくなかっただけだよ」

「ふーん」

「つーか、前田って何で死んだの？」

「俺？　俺はね、転落事故」

前田は入場料を支払ってさくさく進む。

「スキーやってたら、スピード上げすぎて変な方向まで飛んでっちゃって、どっかに頭ぶつけて死亡。目覚めたら五月で死神って名乗る檜皮色した着物着たグラサンのおっちゃんが、酒飲みたいから一ヶ月猶予！　って言ってくれたから今に至る」

「本当にそれ信じてんの？」

前田は毛糸の帽子をはずして後頭部を私に見せた。

「腐ってる」

「脈もないしね。良かったよ。誰か、俺の知ってる人に会えて。失敗したら俺の死体はこのまま見つからずじまいになっちゃうわけ」

「ここでもう一回ぶっ倒れればいいじゃん」
「それはグラサンのおっちゃんとの約束違反」
前田は何でもないことのようにそう言った。近くに穴を見つけて、そこの看板に「ブラジルまでつながっていると伝えられている」と書かれているのを見て爆笑し、私のことなんか気にせずに先へ行く。人はいない。ひんやりと、寒い。
「前田ってさ」
「何」
「下の名前、何よ」
「何だと思う」
「”純子”」
前田は立ち止まって振り向いた。表情は、笑っていなかった。
「……バレてた？」
「バレバレ。整形？」
「違う。性転換ってやつ。少し整形も入ってるけど。……いやぁ、絶対メグムちゃん俺のこと覚えてないと思ったのにな。覚えてないの前提で知り合いのフリして話をしようと思ってたのに。ばれちゃってたか。そうか。そうか」
「どうして死んだよ」
前田は少し笑った。
「やっぱ、さっきのも嘘だってバレてた？」
「バレバレ。自殺？」
「自殺、かける事故」
「どういうこと？」
「首吊ろうとしたらロープが切れて、落ちて頭ぶつけて死亡。本当に死んだのは樹海の中にある、これ以上先に入ったらダメですよ、のビニールテープの先。グラサンのおっさんは本当」
「何で死んだよ」
「……なんつーの？　つまり、俺は、男になりゃ全てうまくいくと思ってたんだよ。親の怪物でも見るような目も、友人のバカにしたような態度も、俺がアベコベだからいけないんだと思ってたんだよ。女の身体で中身、男っていう、そんな継ぎ接ぎだからいけないんだと思ってたんだよ。好きな女の子にも”好きだ”って言える気がしたんだよ。
メグムちゃんのこと、好きだったんだよ。十六のとき。高校行けなくなって、プー太郎だって周りからバカにされたけど、メグムちゃんはそうじゃなかったんだよ。
なんか、だからなのかな。アベコベじゃなきゃいいと思ったんだよ。裏で、性転換やってくれるってところがあって、そこ行って、バイトで貯めたお金でお男になった。
これで人間になった、と思ったんだ。アベコベじゃなくて、人間に。
でも実際は違った。人間どころか、化け物さ。勝手にやったってことで親は勘当。友人は気持ち悪がって近づかない。何より恐ろしかったのはね。
男の気持ちが分からなかったんだよ。
俺は女の身体で中身は男だった。でも今は、つまり、どっちでもない気分なんだよ。
全世界一人ぼっちって感じかな。
馬鹿げてるだろ。それで死にたくなって首吊ったのに、最期に思ったのは『死にたくない』なんだよ。人間の本能って不思議だよね」
前田純子はよく笑う。いつも、下の名前で呼んでたから気がつかなかったのだ。少年みたいに、よく笑う。
「一つだけ、お願いしていい？」
私が言うと、前田はどうぞとあっさり答えた。この返答も軽かった。
「左胸、さわっていい？」
「かまわないよ」

前田はじかに触らせてくれた。男の胸だった。そしてやっぱり水にさらした後のゴムみたいな感触で、どうやっても心臓の鼓動は感じられなかった。

「一つ言っていい？」

「何？」

「……やっぱり気持ち悪い」

前田はふきだした。そうだよね、そうだよね、を繰り返して爆笑した。

＊

グラサンのおっちゃんと約束した日付はいつか尋ねたら、今日だと答えられた。

「だから、これから樹海に行くんだよ」

見送ると言ったらやめてくれと言われた。

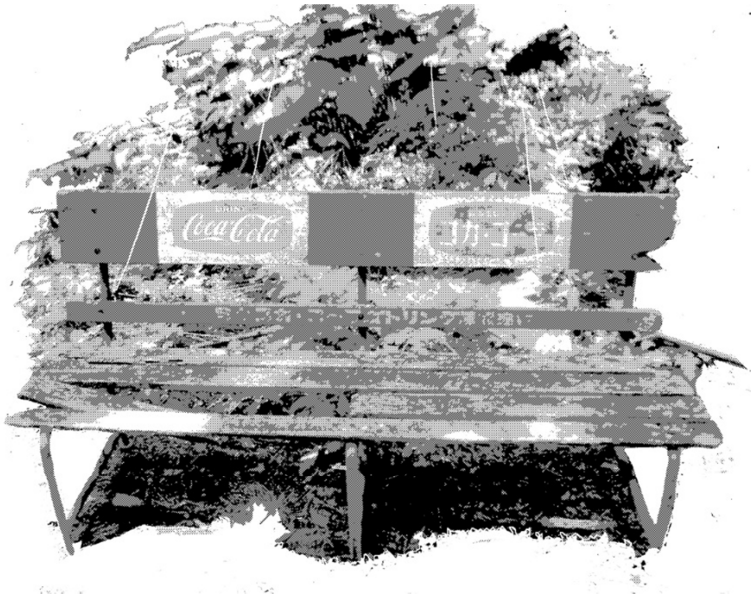
「やっぱ、死体は見られたくないかもしれない」

前田は明るくそう言うとやっぱり笑った。

「ま、メグムちゃんに会えて良かったよ。そんな気がする」

私が黙っているうちに前田は森の奥へ消えた。

もしかしたら島田静香もあちらにいるのかもしれない。そして探せば前田も、島田も、そこで見つかるかもしれない。そんな風に思えた。

でも、私は森の中へは入らなかった。そして帰りのバスに乗って、少しだけ泣いて。

それからしっかり生きようと思った。